

「薬害、自己責任なのか」

イレッサ控訴審 原告団、怒りあらわ

「夢の新薬」とうたわれたイレッサをのみ、家族を亡くした原告は、原告側の逆転敗訴とした15日の東京高裁判決に、怒りをあらわにした。

▼1面参照

原告代表の近沢昭雄さん



記者会見で涙をぬぐう原告の近沢昭雄さん(右)＝15日午後、東京・霞が関の司法記者クラブ

(67)は「命が守れなかったのは自分たちの責任だと言われたようで悔しい。治療のために使った抗がん剤で亡くなるなんておかしい」と語り、唇をかみしめた。

2002年夏、当時31歳だった次女三津子さんは肺がん治療のため、承認直後のイレッサを使った。「副作用がほとんどない」「す

ばらしい薬」と医師らから聞かされた。が、服用して2カ月後、三津子さんは間質性肺炎で亡くなった。

「なぜこれだけの被害が出たのか。判決は医師に責任を押しつけている気がする」と近沢さんは言う。

承認から3カ月。10人以上の副作用死が報告されて初めて、厚生労働省は緊急

玄関で2人倒れ

訪問の男と住人、脇に

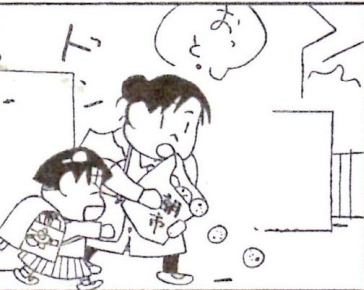
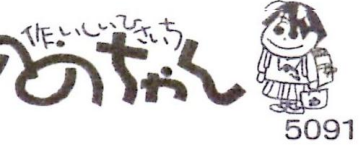
15日午後8時20分ごろ、横浜市栄区笠間5丁目のマンションで「警察官を呼んでほしい。人が刺されている」と、マンションに住む男性から110番通報があった。神奈川県警栄署員が駆けつけたところ、マンシ

ョン2階の一室で、この部屋に住む男性と別の男が倒

原告団はこれまで「賠償を得ることで目的ではない」として、国や企業に抗がん剤治療の改革を訴えてきた。一定の成果につながり厚生労働省はイレッサを使う条件を厳しくし保険適用者を限定することにした。

近沢さんは「個々の悲しい」と話した。

みを前面に出すのではなく、これからの抗がん剤治療を考え、もっと大きな問題として考えることが大切。国や製薬会社には判決を通点とし、よりいっそう患者の被害が拡大しないような方策を考えてほしい」と話した。



9	12	15	18	21	24時	17(木)	18(金)	19(土)
60	2	3	30	4	4	10	7	11
50	4	1	40	6	2	10	10	14
50	8	3	50	9	3	20	14	18
100	7	4	50	9	5	20	14	18
50	10	4	10	10	4	10	14	18
80	10	6	50	12	9	30	16	70
0	12	6	20	13	6	30	14	80
0	13	7	20	15	8	30	15	60
								19

冬の気圧配置が続く。